

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第16回 みつ はし きん た ろう
三橋金太郎

成田英漢義塾を運営する

三橋金太郎は、明治3(1870)年11月12日、埴生郡成田村(現在の田町)に父富五郎、母はまの長男として生まれた。生家は成田山東門入り口で旅館「あづまや」を営んでいた。

15歳のとき、埴生郡土室村(現在の土室)に県議会議員の小倉良則が開いた北総英漢義塾に入塾。片道10キロの田舎道を通して勉学に励んだ。英学・漢学・数学の3教科を教えていたこの塾からは、奈良県知事の成毛基雄、県議会議員の大沢熊五郎などの人材が輩出されている。

その後、北総英漢義塾から第14世新勝寺貫首の三池照鳳しょうほう(広報なりた3月15日号掲載)が開設した成田英漢義塾に移籍し、その第1回卒業生となった。

やがて、三池照鳳らが多忙のため、金太郎が運営を一任された。ところが、授業料の負担があること、教科不足により卒業しても高等学校へ進学できないことなどで塾生が減ってしまった。また、経営が困難を極めている矢先に、三池照鳳が遷化するという事態が重なり、義塾は廃校になるのではないかという風評が広まった。



左/興亜道路の建設(『成田の歴史アルバム』より)

右/三橋金太郎の墓と石碑(場所:田町白髪毛墓地)



明治3年～昭和21年(1870～1946)

埴生郡成田村(現在の田町)に生まれる。成田英漢義塾の第1回の卒業生となった。石川照勤に尋常中学校設置の必要性を説き、成田中学校(現在の成田高校)設立に尽くした。昭和13年から21年まで、成田町長として町政に携わった。また、正月の門前の交通混雑を緩和するための興亜道路の建設に手腕を発揮した。



そこで、新たな塾主となった15世新勝寺貫首の石川照勤(広報なりた6月15日号掲載)に、塾を尋常中学校へ改組することを申し出た。

金太郎たちの熱心な願いにより、明治31年10月、尋常中学として成田中学校(現在の成田高校)が開校された。これは成田山が経営する私立の中学校であった。

成田町長として活動

昭和13(1938)年の成田山開基一千年祭を控え、檀家総代となった金太郎は、寺と町の発展のために開帳を計画した。そして金太郎らは東京深川(現在の東京都江東区)の深川不動堂に泊まり込み、中央の政界、財界の有力者に奉賛会への寄付を募った。

明治43年から大正10年まで3期12年間、町会議員を経験していた金太郎は、昭和13年8月、67歳という高齢で第14代目の成田町長となった。翌年、成田の正月の交通混雑を緩和するために、田町～東町～現在の市役所下～京成成田駅前をつなぐ道路の整備を計画し、多くの町民の労働奉仕でこれを完成させ「興亜道路」と名付けた。

昭和21年1月4日、在職7年5カ月、現職のまま76歳で生涯を閉じた。田町の通称白髪毛しらぼっけの墓所に眠る。「新勝院東谷道雄居士」の院号は、新勝寺開山以来、最高のものといわれている。

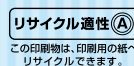
編集後記

「今年は異常気象だ」。この言葉、毎年言っている気がしますね。この大変な状況を普通に感じてしまっていますが、今年は本当に異常だったと思います。年の初めは多くの地域で平均気温が例年を下回り、成田でも大雪が降りました。夏の記録的な猛暑は記憶に新しいと思います。また、最近では全国各地での集中豪雨や、強い台風が上陸するなど、気象に振り回される日々です。1年を通して何事もない年を過ごしてみたいものです。

平成30年10月15日号 No.1373

成田市ホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。